

39:21 しかし、【主】はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。39:22 それで監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手にゆだねた。ヨセフはそこでなされるすべてのことを管理するようになった。39:23 監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは【主】が彼とともにおられ、彼が何をしても、【主】がそれを成功させてくださったからである。

40:1 これらのことの後、エジプト王の献酌官と調理官とが、その主君、エジプト王に罪を犯した。40:2 それでパロは、この献酌官長と調理官長のふたりの廷臣を怒り、40:3 彼らを侍従長の家に拘留した。すなわちヨセフが監禁されている同じ監獄に入れた。40:4 侍従長はヨセフを彼らの付き人にしたので、彼はその世話をした。こうして彼らは、しばらく拘留されていた。40:5 さて、監獄に監禁されているエジプト王の献酌官と調理官とは、ふたりとも同じ夜にそれぞれ夢を見た。その夢にはおのおの意味があった。40:6 朝、ヨセフが彼らのところに行って、よく見ると、彼らはいらいらしていた。40:7 それで彼は、自分の主人の家にいっしょに拘留されているこのパロの廷臣たちに尋ねて、「なぜ、きょうはあなたがたの顔色が悪いのですか」と言った。40:8 ふたりは彼に答えた。「私たちは夢を見たが、それを解き明かす人がいない。」ヨセフは彼らに言った。「それを解き明かすことは、神のなさることではありませんか。さあ、それを私に話してください。」40:9 それで献酌官長はヨセフに自分の夢を話して言った。「夢の中で、見ると、私の前に一本のぶどうの木があった。40:10 そのぶどうの木には三本のつるがあった。それが芽を出すと、すぐ花が咲き、ぶどうのふさが熟して、ぶどうになった。40:11 私の手にはパロの杯があったから、私はそのぶどうを摘んで、それをパロの杯の中にしばって入れ、その杯をパロの手にささげた。」40:12 ヨセフは彼に言った。「その解き明かしはこうです。三本のつるは三日のことです。40:13 三日のうちに、パロはあなたを呼び出し、あなたをもとの地位に戻すでしょう。あなたは、パロの献酌官であったときの以前の規定に従って、パロの杯をその手にささげましょう。40:14 あなたがしあわせになったときには、きっと私を思い出してください。私に恵みを施してください。私のことをパロに話してください。この家から私が出られるようにしてください。40:15 実は私は、ヘブル人の国から、さらわれて来たのです。ここでも私は投獄されるようなことは何もしていないのです。」40:16 調理官長は、解き明かしが良かったのを見て、ヨセフに言った。「私も夢の中で、見ると、私の頭の上に枝編みのかごが三つあった。40:17 一番上のかごには、パロのために調理官が作ったあらゆる食べ物が入っていたが、鳥が私の頭の上のかごの中から、それを食べてしまった。」40:18 ヨセフは答えて言った。「その解き明かしはこうです。三つのかごは三日のことです。40:19 三日のうちに、パロはあなたを呼び出し、あなたを木につるし、鳥があなたの肉をむしり取って食うでしょう。」40:20 三日目はパロの誕生日であった。それで彼は、自分のすべての家臣たちのために祝宴を張り、献酌官長と調理官長とをその家臣たちの中に呼び出した。40:21 そうして、献酌官長をその献酌の役に戻したので、彼はその杯をパロの手にささげた。40:22 しかしパロは、ヨセフが解き明かしたように、調理官長を木につるした。40:23 ところが献酌官長はヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった。

導入

今日も、ヨセフの人生をテーマにシリーズの学びを続けましょう。

ヨセフは正しいことをし、誘惑を退けて、神をたたえました。けれども、彼は外国の暗くて汚い牢獄に放り込まれました。

ヨセフに与えられた選択肢はふたつです。神に対して腹を立て、自分の置かれた状況を恨むか、このような状況でも神に信頼と希望を置くかという選択です。

ヨセフは、「あなたの御名をたたえるために牢獄で私がどうすることを望まれているのでしょうか」と神に尋ねることにしました。

不当な苦しみを受けることは、私たちにとってもっとも厳しい試練のひとつです。

不当な苦しみに遭わせられた経験がある人もおられるでしょう。
悪いことをしていないのに、罰せられたという経験かもしれません。
または、与えられた状況の中で正しいことをおこなったはずなのに、神が報いてくださらなかったように感じられたという経験かもしれません。

これまでの歴史で、神をたたえたはずなのに、神に失望させられたと感じる結末だったというクリスチャンの人生の例は多数あります。

ウィリアム・ティンデルは、新約聖書を英語に翻訳したことで英国王に処刑を命じられ、殉教しました。それまでは、聖書はラテン語のものしかなく、一般大衆が読むことはできませんでした。ウィリアム・ティンデルは、火刑に処される前、神への祈りを叫びました。彼の祈りは、「神よ、英国王の心を変えてください」というものでした。

その数年後、ティンデルの祈りは答えられ、英国王の心は変えられました。英国王は、全国の教会に聖書が設置されるようにという勅令を出しました。この聖書は非常に好評で、英国内の教会の講壇にくくりつけなければならないほどでした。というのも、この聖書があまりの人気で、盗まれるようになったからです。

ずいぶん昔の話ですが、ふたりの宣教師が、朝鮮の砂浜で殉教しました。現在の北朝鮮にあたるその場所は、韓国の大リバイバルの発祥地です。元々の働きが、現在まで継承されていると言えます。

39 : 21 には、恨んだり腹を立てたりせず、主がヨセフとともにいて、あわれんでくださったことがわかります。

神は、監獄の長にヨセフが気に入られるようにされました。
それで、監獄の運営がヨセフに任せられました。
もちろん理想の職ではありませんが、監獄の中では一番良い仕事でしょう。

では、40 章に入ります。

聖書は、エジプトの王パロが献酌官長と調理官長に気に入らないことをされて腹を立てたと語ります。

ふたりは、ヨセフが入っていた監獄に送られました。
このころには、ヨセフは囚人の生活を管理する責任者でした。
現代風に言えば、「傾聴者」です。
英国の刑務所では、特権を与えられた長期受刑者がいます。
そういった受刑者は、刑務所の内部を自由に移動し、他の受刑者をあらゆる面でサポートします。自殺防止カウンセラーとして訓練された受刑者もいます。
ヨセフは、監獄の中で自由を与えられていました。そして、怠けてその自由を無駄にすることはしませんでした。
ヨセフは、囚人たちのお世話をしようと一生懸命に働きました。

新しく入った囚人たちは、ヨセフが世話をすることになりました。
ある朝、ヨセフが囚人たちのところに行くと、献酌官長と調理官長がしょんぼりしていました。ヨセフは、なぜそんな顔をしているのかと聞いてみました。
すると、ふたりが同じ夜に夢を見たけれど、その夢の意味を解き明かしてくれる人がいないということでした。

ここで、文化的背景について考える必要があります。
当時のエジプトでは、夢を深刻に受け止めるのは一般的でした。
夢は、エジプトの神々が未来について人間にお告げをする方法だと信じられていたからです。

当時は、高額を取って夢を解き明かすプロの夢解釈人がいました。
とくに、一対となる夢を見た時は、真剣に受け止めなければならないと考えられていました。

8 節には、ヨセフがまずこのふたりの囚人に証をしたことが記されています。ヨセフは、献酌官長と調理官長に、夢の解釈は神がされることだと語りました。

ヨセフは、大胆にも自らの信仰を試したのです。神は、ヨセフの信仰を報わざるを得ません。

ヨセフは、献酌官長の夢をまず解き明かしました。

13 節には、献酌官長は三日後に元の職務に戻れるとあります。

14 節で、ヨセフは献酌官長が元の職務に戻れたら、助けてくれるように頼みました。そして、自分の無実について説明しました。

16 節で、献酌官長の夢の解き明かしを聞いた調理官長は、きっと自分の夢もよい話だと思ってヨセフに内容を話しました。

しかし、その夢の意味は、よいものではありませんでした。

調理官長は、三日後に監獄から出され、処刑されるというものでした。

ヨセフの夢の解き明かしは正しく、すべては現実になりました。献酌官長はもとの職務に戻され、調理官長は殺されました。

残念ながら、23 節は、献酌官長がヨセフのことを忘れてしまったと語ります。つまり、献酌官長はヨセフを助けるチャンスがありながら、そうしなかったのです。

41 : 1 には、ヨセフがそれからさらに 2 年、監獄でひどい生活を強いられたとあります。

適用

ヨセフは、恨みを募らせても当然の状況で、そうはせずに主イエス・キリストをあらかじめ示しました。

ペテロ第一 2 : 21-23

2:21 あなたがたが召されたのは、実にもそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。 2:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。 2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

ヨセフのように、私たちも不当な扱いを受けることがあります。

体験する内容は違っても、つらい苦しみをひしひしと感じるのは同じです。

不当な扱いを受けた時、どのように対処するかが私たちの課題です。簡単ではありませんが、実生活に応用できる教えがあります。

ヨセフが経験した試練と似たような目に遭うとき、次の 4 つの事柄を覚えておく役に立つでしょう。

1. 苦しみや試練が来ても、驚かない。

私もそうですが、試練に遭うと、たいていの場合ショックを受けます。

まず苦しみについて私たちが理解すべきなのは、苦しみはクリスチャン生活において何も例外的な出来事ではないということです。

4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、 4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。

多くのクリスチャンは、苦しみはわけのわからない不幸で、神のご計画外のマイナスなものとして捉えてしまいがちです。

ローマ 8:28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

中には、クルーズ船のような生活を望むクリスチャンもいます。けれども、実際にはクリスチャンの人生は戦艦のようです。

イエスは、「あなたがたは、世にあっては患難があります。」とおっしゃいました。

イエスは、不当に扱われて苦しんだ究極の例です。

イエスの裁きが行われた際、ピラトは繰り返し、「私は、あの人には罪を認めません。」と言っています。

ヨハネ 18:38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」

ヨハネ 19 : 4,6

19:4 ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」

19:6 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につける。十字架につける」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」

ペテロ第一 2 : 20 には、私たちが良いことをして苦しみ、それに耐えるなら、神の御前に立派なことだと記されています。

ペテロ第一 2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行っていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。

21 節は、イエスの足跡に従うようにと勧めます。

これは、大きな課題です。

ヨセフはその課題に取り組み、神の助けを得て、それを成し遂げました。

私たちはどうでしょう。

もちろん、神の助けやキリストにある兄弟姉妹の助けなしにはできません。

少し前、この教会の創立牧師であるジャック・マーシャル師と昼食を食べました。

そのとき、ジャック師は昔の試練や課題について思い起こしておられました。

そして、こう言われました。「ロープの最後までたどりついたら、そこで結び目を作って、それにしっかりつかまること。」

簡単に言うと、もうこれ以上は無理という状況になったら、イエスにつかまっていれば、イエスは私たちを離されないということです。

イエスは、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」とおっしゃいました。(ヘブル 13 : 5)

これが、次のポイントにつながります。

2. つらくてもあきらめない。

不当な苦しみに遭う場合、どうせこうなるならきよい生き方をやめてしまえばよい、とあきらめる誘惑にかられます。

ヨセフは監獄で、正しく生きた結果がこれなら正しい生き方なんてもうたくさんだ、と文句を言うこともできたでしょう。

けれども、そうやって愚痴をこぼす様子は記されていません。

詩篇 73 篇を読んで、そのことばに思いをめぐらしてみてください。
今ここでは、1-3 節と 27-28 節のみ読みましょう。

73:1 まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。 73:2 しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。

73:27 それゆえ、見よ。あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。 73:28 しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなので、私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語りあげましょう。

3. つらいからといって、八つ当たりしてはいけない。

私は昔、ロンドンでカウンセリング講座を受けました。

クリスチャンの講座でしたが、そこでとても貴重なことを学びました。

それは、試練などつらい目に遭っている人、何らかの怒りを持っている人は、他の人を傷つけることで自分の怒りを発散するということです。

誰かを傷つけたり、誰かのせいにしたりすることで、少し気持ちがおさまるのです。

これを心理学で「置き換え」と呼びます。

私は、クリスチャン、ノンクリスチャンに関わらず、こういう行動を何度も目にしました。

本当は、クリスチャンがそうであるべきではないのですが、ある程度みんながそうしてしまいます。

この「置き換え」を最小限にとどめるのに、詩篇が役に立ちます。これについては、リトリートで学びます。

使徒パウロは、不当な苦しみにどのように対処すればよいかを教えてください。

ローマ 12 : 17-21

12:17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。 12:18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。 12:19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」

12:20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。 12:21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。

パウロは、報復することを拒み、悪に対して善で立ち向かうなら、神が私たちの守護者になってくださると語ります。

彼は、自身の経験を例に挙げて語ります。彼はコリントで人々から中傷を受けていましたが、それに対して次のように答えました。

コリント第一 4 : 3-4

4:3 しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。

4:4 私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。

自分で自分を守る必要はないのです。神が必要なときに、私たちを守ってくださるからです。

4. 他の人を助ける機会を逸してはならない。

不当な苦しみにへの対処法で最後のポイントは、その状況を、他の人を助ける機会にするということです。

創世記 40 : 6-7 には、ヨセフが献酌官長と調理官長の落胆した様子を見て、その理由を聞き、機会を活かしたことが記されています。

ヨセフは、犯罪者をわざわざ思いやって支えたのですが、それをしなければならなかったわけではありません。

ヨセフがふたりの落胆した様子に気づいたのは、彼らを気にかけていたからです。

自分が管理を任されていた人全員に対する配慮があったということです。

ヨセフが置かれていたのは理想的な環境ではありませんでしたが、彼はそれを乗り越えて、他の人たちに気を配りました。

私は今、イギリス人作家ジェフリー・アーチャーの本を読んでいます。彼は一時期、英国で最悪といわれる刑務所で服役していたことがあります。

彼がそこでやっていけた支えはふたつだそうです。

1. 自身の体験記を書いていたこと。
2. 受刑者たちに文章の書き方を教えていたこと。

重いうつ症状に悩まされたある大学教授の話があります。

教授のうつ症状はあまりにも深刻で、何もかもどうでもよくなったそうです。すべてが絶望的に見えたといいます。

ある日、訪ねてきた友人が、人生を振り返って、自分を助けてくれた人たちのことを思い出してみようと言いました。

そして、その中からひとり選んで、その人に感謝の手紙を書くようにと言いました。

それで教授は、文学が好きになるきっかけを作ってくれた学校の先生を選び、お世話になりましたと感謝の手紙を書きました。

すると、年配の女性教師から返事が来ました。

そこには次のように記されていました。

「ウィリアムくん、あなたの手紙を読んで、涙で目がかすんでしまいました。私のクラスにいた頃の幼いあなたのことを覚えていますよ。年老いた私の心を、あなたは温めてくれました。教師になって 50 年、このような感謝の手紙を生徒からもらったのは初めてです。この手紙は一生大切にします。」

その手紙は、うつで苦しんでいた教授の人生に小さな光を届けました。

教授は、他にも大切な人に感謝の手紙を書くことにしました。

そして、もうひとり、もうひとり、とついには 500 通の感謝の手紙を書きました。その後、教授はうつ症状から完全に回復しました。

落ち込んだりくじけそうになったら、助けを必要としている人がいないか周りを見渡してみましよう。もしかすると、神はそれを用いて苦しみから解放し、祝福してくださるかもしれません。

あきらめずに、イエスに心を向けましよう。

(ヘブル 12 : 1-2)